

CREST「人間と情報環境の共生インタラクション基盤技術の創出と展開」

研究領域中間評価報告書

1. 研究領域としての成果について

(1) 研究領域としての研究マネジメントの状況

「ネットワークにつながれた環境全体とのインタラクションの高度化」という、時代に即した目標を設定し、戦略目標に対して適切に研究課題の選考が行われた。関連する専門分野において知識や経験が豊富で実績のある研究者を領域アドバイザーとして配置し、マネジメントが活発に行われている。また、研究領域を効果的に推進するための様々な工夫や取り組みが行われている。

ただし、採択課題が技術開発を中心とするものが多く、人の理解、社会との関わり合いなどの部分は手薄となっている。社会科学をはじめ、幅広いアドバイザーを活用し、広い視野から領域を形成するような努力が必要であると考えられる。2018年度採択研究課題の課題中間評価時には、脳科学の専門家を外部評価委員として加えているが、領域アドバイザーの追加等も検討する必要があるだろう。また、領域内チーム連携の研究課題公募「Colab」を実施するなど、領域内連携にインセンティブが働くような運営はなされているが、目標とする研究領域が構築されるように、分野を超えた研究者同士の連携や共同研究を推進し、シナジーを創出できるようなマネジメントのさらなる強化が必要である。

本研究領域において、どのような課題の解決を図ろうとしているのかを具体的に示すとともに、そのために必要となる「インタラクションを高度に支援する基盤技術」とは何か、実世界への展開、社会的・経済的な貢献を果たすためにどのような研究が必要かなどを再定義し、本研究領域で行われている研究との関係を明確化しつつ、連携研究をさらに強化し、研究領域の構築を目指して推進していただきたい。

(2) 研究領域としての戦略目標の達成に向けた状況

戦略目標の達成に向け、個々の研究課題において研究活動は活発に行われており、研究発表論文数などの業績も多く、国際的にも非常に高い水準の科学的・技術的成果が得られている。研究領域としての活動も活発に行われている。戦略目標の達成に資する成果の創出へ向けた具体的な貢献として、例えば、小池チームの古屋グループ（ソニーコンピュータサイエンス研究所）による、新たな音楽教育プログラム「ミュージック・エクセレンス・プロジェクト」を挙げることができる。若手ピアニストが、自らの感覚運動機能や演奏技能を科学的に計測したり評価したりする、スポーツ界では既に常識となっている自己フィードバックではあるが、音楽的な感性や解釈が、そうした確かな身体技能に支えられ得るという経験知が、このプログラムによって客観化・具体化した意義は大きく、社会的・経済的価値の創造に貢献すると言えよう。

ただし、全体としての研究領域の構築、戦略目標の達成という点において、現段階では十分な成果が得られているとは言えない。研究領域としてのまとめや目指す社会像がわかりにくく、どのような人と情報とのネットワーク社会を目指すのかというメッセージ性も弱い。本研究領域では、「高度に最適化された社会」という目標が述べられているが、様々な社会的課題の解決、多様な価値の創出、人の幸福の実現、社会・環境の健全性維持などの重要性が高まっており、技術がもたらし得る負の影響（健康、ストレス、社会的課題など）にどう予防・対応するかという観点までも含め、社会的側面もさらに深掘して領域研究を推進していただきたい。

また、イノベーションの推進、応用など、社会的・経済的な貢献についても、まだ十分な成果には至っておらず、さらなる工夫と努力が必要である。これからの展開に期待したい。一方、新型コロナウイルスの感染拡大により、「インタラクション」環境に大きな変化が生じている。情動的インタラクションのみならず物理的インタラクションが持つ意味、仮想世界と現実世界のインタラクションの違いなどを明らかにしつつ、今後の社会において必要とされる「インタラクション」に関する研究開発を進めることが求められている。本研究領域において今後これらに資する成果が得られることを期待する。

以上より、本研究領域は戦略目標の達成に資する成果の創出に貢献が期待できると評価できる。

以上